

難波西鶴

海の道

【54】

森田 雅也

「船中八策」で有名な幕末に活躍した坂本龍馬。ご存じのように

京都、長州、薩摩と駆け回りますが、その拠点は海援隊の本拠地「長崎」。もちろん、

海の道を利用して、維新回天はなりました

『世間胸算用』(元禄五(1692)年刊)巻四の四「長崎の餅柱」は、西鶴のころの長崎の様子をあげます。

その中に長崎では、正月のこちそう用の山海の具材を台所につる

す風習が書かれていることは、前回にあげました。他にも面白い大みそか風景が書かれています。

女の物こいたちが、顔を赤く塗り、恵比須・大黒の土人形を持ち、粗塩を台にのせてやってくる。「今年の恵方の海より潮が参りました」と言ってお家々を祝って回ります。これは、大みそかの厄払いや正月の門付け芸と同様で、物こいたちの金稼ぎなので、めらめら祝う方も、長崎が港の安全を第一とする

海の町だからでしょう。お年玉はあまり高価なものを用意せず、男には一匁(約2千円)の祝いに50本ずつの安扇の返し、女には煎茶を少し紙に包んで渡すという慣習です。

西鶴は「この豫遊なればをかしからず」とかく住みなれし所、都の心ぞかし」と評します。「郷にいれば郷に従え」「住めば都」というような意味でしょうが、上方と違う長崎の年末年始の風景を楽しんで見えますね。

賢いだけでは成功せず

今でも毎年「行く年来る年」というたぐいの日本各地の年末年始風景を知る番組が人気ですから、当時なら当然でしょうね。

そんな長崎には、いろいろなタイプの商人が出入りします。諸国の商人の誰もが正月は故郷で祝いたいものなのに、京都から20年近く、長崎商いで下ってきて正月を過ごしている小商いの生糸商人がいます。

この男は万事に賢く、京都から長崎まで銭一文無駄にせず、長崎に滞在中に丸山遊郭をのぞくこともしません。したがって、評判の美人太夫「金山」のしやきとした唇姿も、「花鳥」の首筋の白いことも夢にも見ませ

ん。丸山遊郭の「花鳥」のことは以前にも紹介しましたね。枕もとにはソロバン、商売の手控えを離しません。明け暮れ、中国人の愚かな商人を探し、もうけのよい商売をしようとするのですが、今時の中国人は日本語を覚え、借家を貸す以外、お金を出資してはくれません。利益の歩合が多い家を買っておくことが堅い商売だと学習してしまっ

たからです。ましてや、日本人の知恵者は、よいもうけをさせてもらえませんが、

長崎は商いに抜かりのない地なのです。賢いだけでは成功しないだけでした。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

商いに抜かりない地・長崎